

台湾鄭成功主神廟縁起補遺及び鄭成功配神廟

文学研究科国文学専攻博士後期課程満期退学 小俣 喜久雄

一

私は二〇〇二年より今日まで台湾で鄭成功を主神として祀る廟宇の実地調査をおこない、その廟縁起を日本語翻訳し拙稿「明清期創建、台湾鄭成功廟縁起（前、後）」（『東洋大学大学院紀要第四十七、四十八号』（二〇一二年三月、二〇一二年三月））及び「日本統治期創建、台湾鄭成功廟縁起（前）」（『東洋大学大学院紀要第五十二号』（二〇一四年三月））において紹介してきた。さらにこれらの後編に当たる「日本統治期創建、台湾鄭成功廟縁起（後）」「光復期創建、台湾鄭成功廟縁起」を統括し、増補及び再整理したものを拙著『台湾・開台聖王鄭成功主神廟の研究』（致良出版社、二〇一六年十月）に掲載し一つの完成とした。なお前記三篇の拙稿では明清期主神廟が四十三座、日本統治期が前編のみで十六座紹介した（そのうち、《2》宜蘭冬山龍安宮（国聖廟）と《6》南投国姓護国宮は拙著では明清期成立創建に改めた（《2》宜蘭冬山龍安宮（国聖廟）・（乾隆四十九（一七八四）年頃同地で奉祀が始まった力）、《6》南投国

姓護国宮・（光緒十四（一八八八）年頃当地で奉祀開始）。拙著においては明清期五十五座、日本統治期三十九座、光復期三十五座の計百二十九座の台湾鄭成功主神廟縁起を日本語要約して掲載した。しかしながらその後も私は鄭成功信仰研究を継続しており、さらに数廟の主神廟の存在を確認或いは認定した。

本稿ではまずそれら鄭成功主神廟六座（明清期三座、光復期三座）及び日本と中国に存在する主神廟を各一座紹介した。

さらに台湾において鄭成功主神廟調査を遂行していくうえで、鄭成功は主神ではないながら当該廟宇の重要な拝神として奉祀されている廟を十数座、調査確認している。これを鄭成功配神廟として掲載した。これらの廟は当該廟宇、当該地域のみならず台湾の他地域の主神廟等ともかわりがあるものも多く、鄭成功信仰を検討するうえでも重要なものである。

なお拙稿「日本統治期創建、台湾鄭成功廟縁起（前）」末尾で補遺として掲載した（補遺2「開台聖王府」、補遺3「湧蓮寺（後殿

が懋徳宮) 廟宇の写真が遺憾ながら最終校正後に欠落し、そのまま版行されてしまったので、本稿で補った。

台湾各廟の実地調査期間は二〇〇二年より二〇一九年である。住所は調査時のものである。

要約上の凡例は「明清期創建、台湾鄭成功廟縁起(前、後)」及び「日本統治期創建、台湾鄭成功廟縁起(前)」にほぼ同じだが便宜上、再掲載する。

二 要約凡例 (「明清期前後編」「日本統治期」「光復期」「配神廟」に共通)

ア. 要約における主資料は各廟の廟誌や廟内の碑等にまとめられた縁起である。また縁起等がない廟は実地調査時の廟の責任者等の発言を要約として取り込んだ廟もある。

イ. 鄭成功は各廟では「開台聖王」「国姓爺」、「延平郡王」、「開山聖王」、「開山尊王」、「延平王」、「国姓公」、「国聖公」、「国聖爺」、「鄭延平」「鄭国姓」、「鄭国聖」等と呼び名が異なるが、要約中では主に「鄭成功」、「開台聖王」で統一した。各廟でも上記両者に「国姓爺」、「延平郡王」を加えた四つの名称が多く使用されている。

ウ. 各廟に縁起碑や縁起を記した廟誌等が無い場合、出来る限り関連論文、書籍等を利用し、日本語要約を行った。利用資料は各

廟要約冒頭に示した。但し以下の資料は利用頻度が高いので、利用した場合、下記の略号で示した。

A・『国姓爺 延平郡王 開台聖王 鄭成功與台湾文化資産特展 図録』(発行：台南市文化資産保護協會 主編：傅朝卿 編輯：廖麗君 台南市大学路一号国立成功大学建築系C+A研究室 日期：民国八十八(一九九九)年六月) ↓「特展図録」
B・謝進炎／何世忠編著『鄭成功傳奇的一生』(安平開台天后宮・二〇〇〇年三月) ↓「傳奇性的一生」

C・彭紹周著『台湾道廟誌第一輯・宜蘭県』(台北市・中華道教文化服務有限公司・一九八六年十二月) ↓「台湾道廟誌1宜蘭県」
D・江鏗萍氏「鄭成功信仰的成立與發展」(二〇〇〇年六月・国立成功大学修士論文) ↓「成立與發展」

E・盧胡彬著「宜蘭境内国姓爺祀廟及其信仰」(『白沙人文社会学報第三期』・二〇〇四年十月) ↓「宜蘭境内」

F・地理資訊科学研究専題中心「文化資源地理資訊系統(台湾寺廟)」(http://cgis.rchss.sinica.edu.tw/temple#?cl=Temp&le&b_start=0) ↓「文化資源」

エ. 「國→国」「縣→県」「學→学」「圖→図」「臺→台」「灣→湾」等、適宜通行の字体に改めた。

オ. 日本統治期の年号は縁起内で光緒、宣統、民国前の年号で記されていても原則として、明治、大正、昭和を用いた。また西曆

と共に併記した場合もある。

カ. 江氏〔成立與發展〕では創建年次につき、縁起には清朝期、日本統治期の創建と記されながら日本統治期総督府調査の「寺廟台帳」等に未記載の廟に関しては第二次大戦終結後の創建と見る等、極めて慎重な姿勢をとられている。頷ける見方である。たしかに寺社縁起、廟縁起には眉唾的な要素も多分に含まれると考えられる。但し一方でそのような要素も縁起作成者の主神や廟に対する意識を探る上で重要である。

本稿では縁起内容の紹介を主目的としているため縁起記載の創建年次を優先し一覧を配列し、二次資料の記事を参考として付記した。実際の創建年次、内容に対する考察は今後の「鄭成功信仰と伝承」研究上で行う予定である。

キ. 当該地で鄭成功への奉祀が始まり、それが後年の廟創建に至った場合はその信仰の始まった時期を基準に一覧を配列し、廟創建年を併記した。

ク. 廟縁起、各種資料、聞き書き、筆者自身の視点は厳格に区別して表記しない。全体を通し、筆者が判断し要点をまとめたものが本稿である。

三 台湾鄭成功主神廟創建縁起補遺及び鄭成功配神廟一覧表

A・拙稿「日本統治期創建、台湾鄭成功廟縁起(前)」補充写真

補充写真―1・補遺2「開台聖王府」
補充写真―2・補遺3「湧蓮寺(後殿が懋徳宮)」

B・清朝期主神廟補遺

清朝期補遺―1 康熙五十五(一七一六)年／台南大人廟／台南市東区東門路一段一七号

清朝期補遺―2 嘉慶七(一八〇二)年頃カ／台中清水聖文宮／台中市清水区高東里護岸路一五六号

清朝期補遺―3 清朝期(或いは日本統治開始前後(一八九五年)頃カ)当地方で信仰開始カ(民国一〇七(二〇一八)年二月七日安座大典)／台南國聖宮／台南市新市区社内三〇―三号

C・光復期主神廟補遺

光復期補遺―1 民国四十(一九五二)年／台中清水成功宮／台中市清水鎮鯉峰里大街路一三八之六号

光復期補遺―2 民国四十七(一九五八)年以前、台中西屯地区で奉祀開始／台中清水聖賢宮／台中市清水鎮田寮里中央北路七―三八号

光復期補遺―3 民国一〇四(二〇一五)年／雲林四湖五股開台尊王鄭成功廟／雲林県四湖郷鹿場村

D・中国大陆及び日本の主神廟

中国 康熙三十六（一六九九）／石井延平郡王祠（鄭氏家廟）／福建省泉州市南安市石井鎮

日本 昭和三十七（一九六七）年／鄭成功廟／長崎県平戸市川内町九七五―一

E・台湾鄭成功配神廟（地域別）

〔要約凡例補充・台湾鄭成功配神廟については地域別で配列した。〕

左記の廟宇においては鄭成功は主神ではないので、縁起内の主神についての記述は簡略にし、縁起内に鄭成功に関わる記述がある場合はこれを掲載した。〕

配神1・新北市 民国三十五（一九四六）年／新北三重鎮安宮（哪

叱公廟・主神 哪叱（中壇元帥）／新北市三重区信義西街一

配神2・苗栗県 明治三十八（光緒三十一・一九〇五）年／苗栗頭

屋雲洞宮・開台聖王廟（三恩主公）／苗栗県頭屋郷鳴鳳村三湖二十号

配神3・台中市 民国五十五（一九六六）年／台中石岡石忠宮（主

神 天上聖母）／台中市石岡区金星里頭坪巷二十一号

配神4・台中市 康熙年間（一六六二年―一七二二年）／台中清水紫雲巖（主神 観音菩薩）／台中市清水鎮鰲峰里大街道二〇六号

配神5・彰化県 康熙五十七（二七二八）年／彰化芬園德興宮（主神

清水祖師）／彰化県芬園郷舊社村德興路一段六五一号

配神6・彰化県 清朝期には存在した（一九一二年以前）／彰化和美高香宮（主神 神農大帝）／彰化県和美鎮東平路二二四号

配神7・雲林県 乾隆道光年間（乾隆年間（一七三五―一七九五）、道光年間（一八二一―一八五〇））／雲林大有永安宮（主

神 北極玄天上帝）／雲林県崙背郷大有村一六五号

配神8・雲林県 嘉慶十二（一八〇七）年／雲林斗六福興宮（主神 開漳聖王）／雲林県斗六市雲林路二段一八〇号

配神9・雲林県 道光年間（一八二一―一八五〇）／雲林斗六受天宮（主神 天上聖母）／雲林県斗六市莊敬路五十五号

配神10・嘉義県 乾隆九年（一七四四）年／嘉義民雄大士爺廟（主神 観世音菩薩（大士爺））／嘉義県民雄郷中樂村中樂路八十一号

配神11・嘉義県 民国六〇（一九七一）年／嘉義竹崎安世宮（主神 王聖公）／嘉義県竹崎郷義和村二鄰山子們二十六の二号

配神12・台南市 明永曆二十二（康熙七、一六六八）年／台南安平開台天后宮（主神 天上聖母）／台南市安平区国勝路三十

三号

配神13・台南市 永曆十五年（一六六一）年／台南鹿耳門天后宮（主神 媽祖）／台南市安南区鹿耳里媽祖宮一街一三六号

配神14・台南市 康熙年間（一六六二年—一七二二年）／台南永康
二王廟（主神 鄭府二王爺）／台南市永康区永二街二王里
三九五号

配神15・台南市 康熙二十九年（一六九〇）年／台南開元寺開山堂
（主佛 三寶佛）／台南市北区北園街開元里八十九号

配神16・台南市 咸豐四（一八五四）年／台南天壇武聖殿（主神

玉皇大帝）／台南市忠義路二段八十四巷十六号

配神17・高雄市 民国三〇（一九四一）年／高雄旗山紫雲堂（主神
觀音菩薩）／高雄市旗山区旗文路二八四号

配神18・高雄市 光緒二十五（一八九九）年／高雄左營東南帝闕樂
善社啓明堂（主神 關聖帝君）／高雄市左營区蓮潭路三十
六号

配神19・台東県 民国六十九（一九八〇）年／台東東海龍門天聖宮
（主神 天上聖母）／台東県台東市中華路一段八八九巷六
十三—一号

付記・筆者現職等—〔台湾〕大葉大学応用日本語学科専任教授・〔日
本〕学習院大学日本語日本文学博士。

本稿は〔台湾〕科技部二〇一八学年度專題研究計画（一般研究計
画）「台湾開台聖王過股研究」、計画编号107—2410—H—2

12—002—の研究成果の一部である。研究費給付に感謝する。
また実地調査時、台湾各地の各鄭成功廟管理者、関係者には御示教、
掲載許可等を賜った。感謝申し上げる。最後に本稿を掲載するにあ
たって東洋大学大学院文学研究科日本文学文化専攻中山尚夫教授に
は多大なる御高配を賜った。深謝申し上げる。

四 台湾鄭成功主神廟創建縁起補遺及び鄭成功配神廟

A・拙稿「日本統治期創建、台湾鄭成功廟縁起（前）」補充写真

補充写真―1・補遺2「開台聖王府」



補遺2 開台聖王府

補充写真―2・補遺3「湧蓮寺（後殿が懋徳宮）」



補遺3 湧蓮寺（後殿が懋徳宮）

B・清朝期主神廟補遺

清朝期補遺―1 台南大人廟

台南延平郡王祠（台南市東区開山路一二五号）境内には「大人廟」の案内看板がある。以下にその日本語版を引用する。

一七一六年（清、康熙五十五年）の創建。代天府とも呼ばれる。主神は朱、李、池三千歳。朱王爺は国姓爺のことを指すといわ



清朝期補遺1
台南大人廟

れる。大正時代に区画整理によってロータリーが造られ、その際、廟は

廃止された。第二次大戦終了後、再建されたが、現在の大人廟は東門ロータリーの北隅に商店と軒を並べて立ち、かつての堂々とした大人廟の面影はない。

つまり本廟で祭祀される王爺のうち朱王爺は開台聖王鄭成功だとい

うのである。しかしながら「大人廟（文化資源資訊系統- <http://cris.rchss.sinica.edu.tw/temples/TainanCity/east/2101046-DRM-1>）」に掲載

される大人廟紹介掲示板写真には、つぎのように記される。

大人廟

俗稱代天府，創建於清康熙五十五年（一七一六年），主祀池、朱、李三位王爺，現址為日治時期拓寬東門路及圓環時所遷建。依三位王爺之神像與姓氏判斷，池王爺黑臉長鬚，「池」與「鄭」之泉州話同音，應為鄭成功；朱王爺紅臉長鬚，且「朱」是明朝皇帝之賜姓，應為鄭經；而李王爺白臉無鬚，鄭克塽之本姓亦恰為「李」。府城聯境組織為清末時期府城城防工作之基本力量，共有八協境、六合境、八吉境、六興境、六和境、十八境、二十一境、四安境、三協境、七合境等。而大人廟為八協境之主廟。

右記事には大人廟は別名代天府と呼ばれていた。清朝康熙五十五年（一七一六）年創建。主神は池、朱、李の三名の王爺である。三名の王爺神像について、池王爺は顔が黒く長い鬚を有し、さらに「池」と「鄭」の泉州方言の発音は同じなので鄭成功を指すとみられる。朱王爺は赤顔に長髯の風貌で、「朱」姓が明朝時代の皇帝から賜ったものであることから鄭経とみられる。李王爺は顔が白く髭がなく、鄭克塽の本姓も「李」と言うそうであるということが記されている。つまり前述の台南延平郡王祠境内案内看板とは内容的に齟齬が生じているのである。

本稿で大人廟を開台聖王主神廟として紹介したのは開台聖王主神廟としてもっとも中心的な廟宇である台南延平郡王祠境内案内看板に大人廟が掲示されていたからである。しかし前述の齟齬の問題な

ど王爺信仰と開台聖王神との関係については問題があるため、あらためて本問題については後稿を期したい。

清朝期補遺―2 台中清水聖文宮

聖文宮については彭瑞金總編纂『重修清水鎮志』（台中市清水区公所、民国一〇二（二〇一三）年八月）などによる。

聖文宮本殿中央には主神の開台聖王、また配神として甘府將軍、萬府將軍、劉府軍師、觀世音菩薩、天上聖母、池府千歳、溫府千歳、太子元帥、福德正神が祭祀されている。

嘉慶七（一八〇二）年、柯姓の人々が台湾に移り住み大甲溪河畔に居を構え、開墾を始めた。しかし降雨があると必ず災害が起こった。柯姓一族はこの苦境からの脱却を模索していた折、領土を切り開いた名声高い開台聖王鄭成功のことを思い出し、開台聖王尊像を彫刻した。そして水難鎮圧のために田んぼの傍らに石造りの小廟を建立し祭祀した。

民国四十二（一九五三）年柯姓一族は烏療（別称柯厝）に引っ越し定住した。だが一族で開台聖王を祭祀するものがたくさんいたので、親族が良き地を選び公廳を建立した。以降、公の祭祀活動が執り行われている。

民国六十二（一九七三）年、陳笑、林子龍等が法師を依頼し、信衆のための民俗活動を始めた。

民国六十九（一九八〇）年、公廳が破損したため、信徒らは廟の

建立を検討、民国七十六（一九八七）年、入火安座の儀式をおこない、同時に「聖文宮」と命名した。その後、民国九十五（二〇〇六）年に二十周年活動をおこない大変な盛況となった。

聖文宮における民国一〇二（二〇一三）年現在の年間の重要行事は、旧暦正月十四日の開台聖王誕生日前後に進香活動がおこなわれている。毎年、旧暦十二月に開台聖王神が降臨し進香場所を指示する。活動に参加する人々はおよそ二百人、また毎年旧暦七月二十日には中元節に関わる行事も執り行われている。



清朝期補遺2 台中清水聖文宮

清朝期補遺―3 台南国聖宮

本廟の創建事情については、中華日報二〇一八年二月七日「鄭成功神像安座國聖宮」記事（記者張淑娟／新市報道<https://tw.news.yahoo.com/鄭成功神像安座國聖宮-151900855.html>）及び民国一〇七（二〇一八）年十二月におこなった実地調査における廟の管理者、



清朝期補遺3 台南国聖宮

鄭森田氏の説明等によるものである。

本廟の創建は民国一〇七（二〇一八）年旧暦正月十六日安座（新暦同年二月七日）であり、供奉される神明は調査時は主神、開台聖王神のみで副神等は祭祀されていなかった。

新市民生縁園近くの土地は鄭氏親族が所有している。祖先

は鄭氏各房が土地を継承する以外、特に国姓爺神のために一分地の土地を残した。土地の所有者は鄭路と国姓爺である。しかし鄭路が亡くなった後土地は登録されず廟建立もされなかった。廟建立地は

鄭森田氏の祖父が開台聖王神の為に残した土地である。廟創建以前は毎年旧暦正月十六日に次回の炉主をポアポエにて選び、炉主の交代をする。いわゆる輪番制祭祀方法であった。炉主は鄭姓しかない。数年前の郷長（鄭枝南氏）は炉主を務めていた時、建廟を提言、そして五年前（二〇一三年）に当地での創建を決議した。

神明に安心していただくための建廟であり、炉主制度も継続されている。しかし、創建以前は毎年の炉主のもとで祀っていた神像は建廟後は廟内に常時安置することとなった。

当地域で開台聖王神の祭祀を始めた時期、また炉主制度が定まった時期は未詳である。但し日本統治時代、天皇のみ拝することが許されていたため祖先鄭路は神像を布袋へ入れ牛稠仔頂に隠し、神像は百有余年守られた。

炉主はすべて鄭姓でさらにすべて親戚である（前述の郷長も親戚である。新市区社内、大社、新市には鄭氏三家族がある）。廟における活動は正月十六日の開台聖王神の誕生日を祝うもののみである。また他の開台聖王廟宇に公的に参詣することはない。当廟は鄭氏の合資により建てられた廟宇である。簡単に言えば、これは鄭氏祖廟である。炉主は毎日朝晩線香を立て、また正月十六日の活動を執り行う。

C・光復期主神廟補遺

光復期補遺―1 台中清水成功宮

成功宮については彭瑞金總編纂『重修清水鎮志』（台中市清水区公所、民国一〇二（二〇一三）年八月）などによる。成功宮の主神は開台聖王、配神は趙公明、關聖帝君、地藏王菩薩、藥師佛、觀世音菩薩、玄天上帝、比干相爺、龍王である民国一〇七（二〇一八）年一月のわたくしの実地調査時には、一階の主神は開台聖王、配神は東嶽仁聖大帝、福德正神。二階は地藏王菩薩、釋迦摩尼佛など。三階は三官大帝、太歳星君などであった。民国四〇（一九五二）年、廟宇が創建され、その後、地方紳士は近隣の清水鎮国姓里にある開台聖王主神廟である鎮安宮より開台聖王の分霊をお



光復期補遺1 台中清水成功宮

迎えし祭祀を始めた。

現在の廟宇は民国六〇（一九七一）年陽月第一期工程終了、民国六十三（一九七四）年菊月第二期工程が終了した。その後、民国七十六（一九八七）年に龍神が夢に現れたため、廟宇の右側に龍神を祀ることとなった。さらに民国八十九（二〇〇〇）年梅月、再建、民国九十二（二〇〇三）年、新しい八仙彩に交換した。

成功宮の重要な年中行事は旧暦正月十四日に台南赤崁樓へ参詣することである。赴く信徒人数はおよそ四〇〇〜五〇〇人である。

例祭日は旧暦正月十四日の開台聖王生誕祭、また旧暦正月十五日の上元節、旧暦七月十五日の中元節、旧暦十月十五日の下元節、旧暦八月一日の普渡法会がある。さらに旧暦十月十二日から十五日の間、劇団を雇い、日々の平安への神への感謝の意を表した。

光復期補遺―2 台中清水聖賢宮

聖賢宮については彭瑞金總編纂『重修清水鎮志』（台中市清水区公所、民国一〇二（二〇一三）年八月）による。

聖賢宮は民国四十七（一九五八）年、台中西屯地区で商売に行き詰った傅氏が奉祀していた開台聖王、觀世音菩薩、玄天上帝、太子元帥、関聖帝君の五尊神像を清水の呉明諺氏に委託し聖賢宮創建のための神尊とした。その後、神威靈驗が現れ、世の中の人々を救うためにはただ狭い自宅内で祭祀しているべきではないと考え、呉明諺氏は一九七〇年代に聖賢宮を建てるための寄付を募り創建に至つ



光復期補遺2 台中清水聖賢宮

た。その後、民国八十六（一九九七）年に古い小廟を解体し、より大きい廟宇に建て直し、民国八十八（一九九九）年入火安座の儀式が執り行われた。聖賢宮中央には主神開台聖王、右側に三官大帝、左側に李府仙祖、廟内上方中央には玄天上帝、右側に觀世音菩薩、左側には開聖帝君が鎮座する。毎年各種行事が執り行われている。民国一〇一（二〇一三）年現在信徒は六百人程だという。

光復期補遺―3 雲林四湖五股開台尊王鄭成功廟

本廟の創建事情等については民国一〇七（二〇一八）年十二月の実地調査における廟の関係者（宮主の親戚）呉氏の説明等による。

当地で建廟が成った理由は宮主、吳宣揚氏が民国一〇三（二〇一四）年に輪番制開台聖王奉祀「五股開臺尊王過爐」の炉主（廣溝



光復期補遺3 雲林四湖五股開台尊王鄭成功廟

村）になったことが機縁である。当時は炉主神（毎年順番で祀られている神像）以外にも彫刻された多くの分身神像があり、信心深い信徒が神像を持ち帰り祭祀することもあった。本廟の宮主自身も一尊を自身の下に留めおき供奉していた。もともと宮主は先祖の家中に祀っていたが、宮主自身四湖で仕事があり、後に宮主の実家がある廣溝村のタンキーを通し開台聖王神が当所での建廟を指示した。本廟に安置される五股からの分霊神像は輪番制祭祀で当該年五股開台尊王神安置場所となった廟宇（或いは家）へ参詣する。

本廟の主神は五股開台尊王からの分霊神像以外にも一尊の開台尊王神像を祀っていた。もとは口湖郷の私人廟宇（廟は現存）に祀られていた一尊である。しかし、その廟の主神は開台尊王ではなく、また種々の神明を供奉していた。それらを整理の際、その開台尊王神像を台南延平郡王祠（台南市東区開山路一二五号）にお送り

した。台南延平郡王祠の主任委員はこの神像を好み、当廟に留め置き供奉したいと思ひポアポエで占ったが神明の許可が得られなかった。本廟と口湖の廟とは交流があり、口湖の廟の関係者からこの一件を聞き、宮主は台南延平郡王祠にて神明が雲林におかえりいただき安座供奉させていただいてもかまわないかポアポエをおこないお伺いを立てた。その願いを開台尊王神がお聞き入れくださり神尊をお迎えして祭祀することとなったそうである。なお民国一〇八（二〇一九）年八月の再調査の際にはこの神像は現在友人の花蓮の廟宇で奉祀することとなり、本廟では神像を新調しているそうである。

本廟の扁額「鄭成功廟」には台北護国延平宮（台北内湖延平宮／台北市内湖区内湖路三段三四八巷六号）の題字が記される。台北護国延平宮との関係は本廟の法会を台北護国延平宮の宮主、王先生が取り仕切っていたことによる。ここに来たばかりのときは多くのことがわからなかったが、王先生は万事に精通しており、王先生に種々の事柄を依頼したのである。

また本廟と南投竹山沙東宮（南投県竹山鎮延平里集山路二段一〇一号）とは交流をしており、時折相互に参詣をする。さらに石井延平郡王祠（鄭氏家廟・中国福建省泉州市南安市石井鎮・本稿「D・中国大陆及び日本の主神廟」掲載）と交流がある。門口の玉旨章印 龔胤は石井鎮の鄭成功廟より贈呈されたもので台湾全土には二座しかない。ひとつは台北護国延平宮にあり、もう一つは本廟である。すべて台北護国延平宮の王先生が事務を執りおこなったものである。

D・中国大陆及び日本の主神廟

中国大陆・石井延平郡王祠（鄭氏家廟）

本祠については「福建南安石井古鎮旅游攻略之延平郡王祠」(<https://www.meet99.com/jingdian-shijing-108665.html>)及び「特展図録」による。

鄭成功の故郷は福建南安県石井鎮である。鄭氏家廟は石井の西亭にある。もともと鄭成功の先祖が居住していた場所である。康熙三十八（一六九九）年に鄭成功の棺を故郷南安の祖先が眠る墓へともに埋葬しよう命じられた。そして当地に南安延平郡王祠が建立された。

一九七六年に華僑の余新河の寄付により修繕され、あわせて鄭成功記念館も建てられた。さらに一九八三年までに当局により廟後方の坂の上に新館が建てられ、鄭成功記念館も随時転入した。政府が管理するものである。

日本・鄭成功廟

本廟は日本唯一の鄭成功主神廟である。昭和三十七（一九六二年）、延平郡王祠（台南市東区開山路一二五号）より分霊され当地丸山公園内に建立された廟宇である。その由来は現地廟宇揭示板及び二〇一八年七月、鄭成功記念館（長崎県平戸市川内町一一一四番地二）に問い合わせたところによると、旧平戸市、山鹿光代市長が台



日本 鄭成功廟

二四）年七月十四日鄭成功がこの岩の上で生まれたという。この石の一部は台南鹿耳門鎮門宮などにも分け与えられ多くの人々の参詣を得ている。

E・台湾鄭成功配神廟（地域別）

配神1 新北三重鎮安宮（哪叱公廟・主神 哪叱（中壇元帥））

本廟については「文化資源」等による。本廟の名称は哪叱公を奉祀しているところからのものである。伝説によると哪叱公神像が側

南で教師をしていたこ

とが機縁となり、その

台湾人の教え子等が平

戸は鄭成功出生の地と

して知られるところか

ら、上記分霊と廟宇創

建を山鹿氏とともに計

画、成し遂げたという。

なお廟近くの千里ヶ

浜南端には「鄭成功児

誕生石」が現存する。こ

れは鄭成功の誕生石と

言われ、寛永元（一六



配神1 新北三重鎮安宮

溝に漂っていた。「打水林仔」と綽名される人がそれをすくい上げ台北橋頭に供奉した。その後、靈験あらたかとなり参詣者が増えたため廟を建立し哪叱公廟と命名し奉祀した。その後、台北橋の立て直し、堤防の建設、道幅の拡幅などの理由から廟宇は現在地の信義公園内に移転した。なお鎮安宮は高齢者からは慣習として李哪叱公廟と呼ばれている。

配神2 雲洞宮・開台聖王廟

本宮については『雲洞宮 開台聖王廟 慶成集福專輯』（民国七十四（一九八五）年五月・雲洞宮開台聖王廟管理委員会）内、「雲洞宮開台聖王廟建廟來由暨恩主靈顯事蹟略記」、「序」及び民国九十九（二〇一〇）年、民国一〇五（二〇一六）年の実地調査等による。雲洞宮の創建は清朝期の光緒十一（一八八五）年に遡る。現在、雲洞宮が建つ土地の天空に眩しい光が輝き、村民の謝阿丁と伍阿旺の二人はそれを目の当たりにした。彼らによると、それはまるで光を放つような、とてもつよく美しい輝きであったという。

現在本宮がある場所の右側に、往時一棟の茅屋があり私塾として用いられていた。当時の私塾教師黄永生がある夜、授業に向かった際、再度光が輝き、そして神霊が私塾学生に憑依し当地に恩主公廟を建て世の人々を救うよう指示された。

明治三十八（光緒三十一年・一九〇五）年十一月二十日に徐保財、巫阿發等、数十人が発起し建廟登記を行った。そして翌年、苗栗庁が建設許可を下し、各方面に募金を募り雲洞宮を建立、關聖帝君恩主公を奉祀した。



配神2 雲洞宮・開台聖王廟

雲洞宮の開台聖王廟は清朝期の光緒年間（一八七五年～一九〇八年（明治二十八（一八九五）年より日本統治））に建てられた。今日まですでに百年近い悠久の歴史がある。宮内には關聖帝君、開台聖王鄭成功が奉祀されており、頭屋と獅潭地域の住民の信仰の中心地となった。たとえ百年間の時を経ても変わらずの篤い信仰を得ている。とくに日本統治時代は、建廟奉祀は禁止されていたが、地域住民の信仰心は抑えることはできなかった。ゆえに關聖帝君に開台聖王を合祀したのである。なおインターネット上、本

宮の主神を恩主公と開台聖王（「苗栗縣頭屋鄉觀光旅遊網（http://www.miaoli.gov.tw/touwu_travel/gmap/index-1.php?m2=10&id=17）」）、或いは開台聖王のみ（「文化資源」）とする資料もあるが実地調査によると、民国一〇五（二〇一六）年現在、両神位の位置付けは主神が恩主公、開台聖王はそれに次ぐ主壇とのことである。

配神3 台中石岡石忠宮（主神 天上聖母）

本廟については「文化資源」及び
民国一〇七（二〇一八）年四月の実地調査による。石忠宮の主神は天上聖母である。嘉義県東石郷の人士が笨港港口宮よりお迎えした神明である。そして民国五十五（一九六六）年旧曆二月初二日正式に開宮された。当初の廟名は「港口分石忠宮」であった。後に廟が入っていた賃貸住宅が契約満了となったため、現在の石忠宮の土地を探し出し廟建立にいたった。なお本廟の近隣には鄭成功主神廟の台中石岡金星開台聖王廟（台中市石岡区金星里萬仙街岡仙巷一二）があるが両廟はとくに関係はない。



配神3 台中石岡石忠宮



配神4 台中清水紫雲巖

紫雲巖は清康熙年間に建立されたという。だが日本統治期の大正六（一九一七）年九月の宗教調査によると乾隆十五（一七五〇）年の創建だという。本廟は清朝期に幾多の洪水被害を受け、さらに昭和十（一九三五）年の大地震でも大きな被害を受けた。そのため当地の有力者らにより、民国三十五（一九四六）年に再建され、往時の雄荘なる廟貌を取り戻した。

配神4 台中清水紫雲巖（主神 観音菩薩）

本廟については彭瑞金總編纂『重修清水鎮志』（台中市清水区公所、民国一〇二（二〇一三）年八月）などによる。主神は観音菩薩、配神は文殊師利菩薩、普賢菩薩、十八羅漢、玉皇大帝、天上聖母、開台聖王、註生娘娘、地藏王菩薩である。当地域の伝説によると、

配神5 彰化芬園德興宮（主神 清水祖師）

德興宮の由来について廟宇内創建縁起を参考にと、本廟は清康熙五十七（一七一八）年に楊道成が福建泉州府の清水巖から清水祖師を台湾府芬園堡頂坑庄へお迎えした。祖師のご利益により



配神5 彰化芬園德興宮

人々は真面目に労働しながら節約し、幸せな日々を過ごしていた。当初は廟宇で祖師を供奉するのではなく、交代で民宅内で祭祀していた。
民国五十八（一九六九）年創建、安座式が執り行われた。それから三十年後村民の増加、主神、配神等のご利益による地域からの参拝者の増加、また廟宇の老朽化により民国八十二（一九九三）年から再建作業が始まり、民国八十六（一九九七）年旧曆十月二十二日に落成式がおこなわれた。廟宇一階には会議室等が設置され、二階の本殿に清水祖師、太子元帥を供奉、左殿には天上聖母、南北斗星君を祀り、右殿には開台聖王、楊府元帥、福德正神が祭祀されている。本廟は宮廷式の容貌を有する廟である。

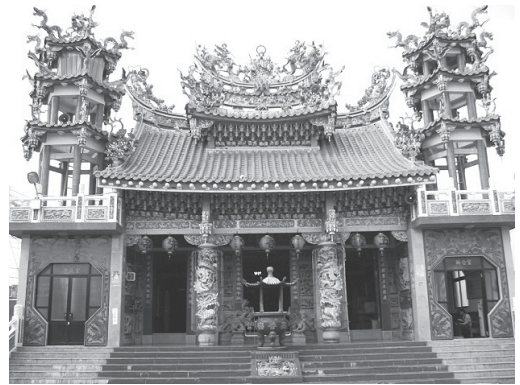
配神6 彰化和美高香宮（主神 神農大帝）

本宮については高香宮境内「十二張犁高香宮創建由来」による。
一、清朝期にすでに「高香宮」は存在した。およそ十二坪の土地で五穀大帝を供奉している。
二、民国前六（一九〇六）年、「劉府千歲」が番社口より分霊され、

同年、金身が安置された。

民国十三（一九二四）年、タンキーの葉等により衆生救済が祈られた。

三、民国二十七（一九三八）年、「開台聖王」が竹山沙東宮より分霊され、同年金身が安置された（劉府にタンキーをお借りして、衆生救済が祈られた）。



配神6 彰化和美高香宮

四、民国五十七（一九六八）年旧暦四月下旬に鹿港奉天宮より蘇府大王爺の金身を分霊され、本宮で奉祀された。民国六十（一九七一年）、タンキー葉金山により衆生救済が祈られた。

五、民国七十七（一九八八）年、本宮の衆神が靈験を顕し、多くの信徒が協力し本宮を建立するよう指示された。そして民国七十八（一九八九）年旧暦十月三十日竣工された。

配神7 雲林大有永安宮（主神 北極玄天上帝）

本宮については宮配布の『雲林縣 崙背郷 大有永安宮簡介』（民国八十三（一九九四）年・大有永安宮重建委員会）及び民国九十四（二〇〇五）年六月の実地調査等による。

清朝乾隆年間（一七三五年

—一七九五年）に、本庄の曾姓という庄民が中国より移住してきたとき、中国湖北省武当山の北極玄天上帝神像を携帯してきた。そして曾氏の私人家堂で奉祀していた。非常に靈験あらたかであった。資料によるとこの神像は明朝末年（一六四四年）に彫刻されたという。今日までに既に三百五十年以上の歴史があるという。つまりこれが現在の本宮の老上帝である。



配神7 雲林大有永安宮

また元々は本庄の鄭家が祖先鄭成功を記念するために鄭氏五房で輪番制祭祀（「五股開臺尊王過爐」）されていた鄭国姓が鄭家の公庁に供奉されている。いわゆる現在知られている「開台尊王」である。伝説によるとこの「開台尊王」神像中には、鄭成功本人の遺体から遺漏した指の骨が入っているそうである。非常に靈験あらたかなものである。しかしこの神像は五年に一回の輪番制で祭祀できるため、本村では一年しか奉祀することはできない。ゆえに民国三十八（一九四九）年建廟の際に村民が五房輪番の老「開台尊王」にもう一尊の開台尊王神像を彫刻し祭祀したいと懇願し神の許可を得た。そし

て本宮で永遠に供奉できるとなった。

また、本宮には財神爺「趙元帥」も奉祀されている。日本統治時代（一八九五年―一九四五年）の初期に、民間の愛国志士の組織、神明会が彫像したものである。さらに保生大帝は清朝光緒年間（一八七五年―一九〇八年）に台中頼厝里の「元保宮」より分霊されたもので、本庄の許家祖先が本庄にお迎えし往時から靈験あらたかであった。

蕭府太傅は、往時、本村村民が近隣の麥寮郷光大寮蕭府太傅祖廟より度々お迎えし陰陽の問題や仇恨の問題を解決していただいたことに感謝するために、今回、廟再建にあわせ五門を増設するにあたり新しい神像を彫刻し供奉した。

本村「永安宮」に奉祀する神尊は中殿に「玄天上帝」、左の日側に「開台尊王」、「保生大帝」、右の月側に財神爺「趙元帥」と「蕭府太傅」。左側の大辺は現在「神農大帝」だが、以後天公殿が完成の際には天公殿にお移りいただき供奉する。右側の小辺は「境主城隍」である。全七尊の神像は主殿と後殿に祭祀する。五階の天公殿は現在建設中であり、玉皇大帝、三清大天尊、南北斗星君を奉祀する予定である。

本宮鎮座の主神「玄天上帝」は邪を駆逐し魔を圧する神明である。左方の「開台尊王」国聖公の将兵は最も多く、清朝期に匪賊を退けたことがあり、現在は陰兵陰將や悪鬼を撃退する神明である。

なお本宮は輪番制祭祀「五股開臺尊王過爐」の五房股（大有村

（甯背郷）にあたる。

配神8 雲林斗六福興宮（主神 開漳聖王）

本宮については廟内「本宮沿革」及び民国一〇八（二〇一九）年八月の实地調査による。

斗六福興宮は清朝嘉慶十二（一八〇七）年の創建である。福建南山寺の一尊の開漳聖王を台湾へお迎えし、漳州府の信徒張士源、陳文堂、陳欽賢、林凱等が渡台した後、斗六鎮保長廓で建宮した。四十人余りの村民が奉祀した。その後は斗六市区鎮西小学校の近くに移転再建された。靈験あらたかであった。

その後、日本統治期に廃廟となったが、この時、宗親会では一尊の開漳聖王神像を彫刻し、毎年炉主宅で輪番祭祀した。この

習慣は現在でも守られている。民国三十四（一九四五）年に台湾光復した後、陳氏宗親会は二月十五日の会議にて再建を提唱した。



配神8 雲林斗六福興宮

右殿には開台聖王を奉祀する。鄭成功は開台聖王、延平郡王、国姓爺、鄭国聖などと呼ばれている。台湾開墾の功績で、民間で建廟奉祀された。誕生日は旧暦一月十六日、参詣者は数えきれないほどである。

なお本宮には主神右方に開台聖王神が副神として奉祀されている。民国一〇八（二〇一九）年八月の調査によると本宮は雲林斗六国聖会開台聖王輪番祭祀や五股開臺尊王過爐輪番祭祀との関りは未詳とのことである。また近隣で同じく開台聖王を副神として祀る雲林斗六受天宮（主神・天上聖母）との開台聖王に関わる交流活動は行われておらず、ただ受天宮での天上聖母生誕祭に福興宮関係者が繞境をおこなうのみである。

配神9 雲林斗六受天宮（主神 天上聖母）

本宮については「文化資源」及び民国一〇八（二〇一九）年八月の実地調査による。本宮の主神は天上聖母である。雲林県文化処資料及び廟関係者によると、受天宮は清朝期の乾隆道光年間に創建された。多くの人々からの信仰を集めた。だが日本統治期（一八九五年―一九四五年）の皇民化運動（一九三七年）のために廢廟となった。民国六十二（一九七三）年に現在地に再建された。廟地は当地域の人士葉碧東氏が寄付したものである。また各地域の熱心な信徒等に寄付金を募り受天宮は落成の運びとなった。

「街頭媽祖間」は現在の斗六受天宮の元廟である。もとの所在地

は斗六圓環であった。前殿は開基天上聖母六尊、後殿は孔子を供奉する。また清朝同治年間の斗六門分縣丞姚鴻祿位がある。左方に聖母堂、右方に雲林四大書院の一つ龍門書院が建つ。

なお本宮には主神右方に開台聖王神が副神として奉祀されている。民国一〇八（二〇一九）年八月の調査によると本宮は雲林斗六国聖会開台聖王輪番祭祀や五股開臺尊王過爐輪番祭祀との関りはないとのことである。また近隣で同じく開台聖王を副神として祀る雲林斗六福興宮（主神・開漳聖王）との開台聖王に関わる交流活動は行われておらず、ただ受天宮での天上聖母生誕祭に福興宮関係者が繞境をおこなうのみである。

配神10 嘉義民雄大士爺廟（主神 觀世音菩薩（大士爺））

本廟については廟外に設置された「民雄大士爺廟」案内看板及び民国九十二（二〇〇三）年七月の実地調査による。民雄大士爺廟は中樂路と昇平路の交差点近くにある。現在の建築は昭和十二（一九



配神9 雲林斗六受天宮



配神10 嘉義民雄大士爺廟

三七）年竣工である。
『嘉義管内採訪冊』の記載によると、清朝乾隆年間（一七三六年—一七九五年）、毎年旧暦七月打猫（民雄の旧名）頂街で毎日午後になると冷やかな風が吹き、鬼の泣き声がし住民等は恐れおののいた。しかし時々高さおよそ一丈、頭に角が生え、赤い甲冑を着、顔は青色で剥き出しの牙、口か

ら火を噴く大士が顕れると、冷ややかな風と鬼の泣き声は止まった。ゆえに町の人々は観音大士の靈験は孤魂を鎮圧すると信じられた。そして毎年、旧暦七月一日に紅緞で大士像を塗り、壇中に奉祀した。そして誦経し孤魂を濟度する。これが「頂街大士爺会」である。
大士爺廟は南座し北を向く。中央に「大士爺廟」があり、左配殿には「開漳聖王廟」、右配殿には「開臺尊王廟」が配置される。「三廟一体」の特殊な建築形態である。

配神11 嘉義竹崎安世宮（主神 王聖公）

本廟については安世宮境内の「安世宮沿革」等による。

本宮は民国六十（一九七二）年八月創建、王聖公を奉祀する。往時、鄭姓の人々が福建省漳州府平和縣黃井凹仔社在住のころ十八年間奉祀していた。後に先人が渡台した際に本境へ神明をお迎えした。鄭姓先祖が祀り後に靈験あらたかとなり信徒も日増しに増え信仰は大いに盛んとなった。ゆえに村民で建廟が協議され王聖公が現住所をお選びになり、当地の所有者鄭清標、清騰兄弟がその土地を献納した。さらに王聖公神自ら鄭清標、鄭朝漳、鄭福生、鄭都、鄭樹旺、



配神11 嘉義竹崎安世宮

鄭水車等を創建委員としてお選びになった。内外の人々の寄付が集まり王勝功自ら民雄郷東湖村の劉順元氏を招き、同年八月吉日開工、十月二十三日竣工、「安世宮」と命名された。

その際、国姓爺神が主神を王聖公神にお譲りになり本宮主神とし、国姓爺と哪吒太子が左右を守護する副神として祀られた。国家人民の安寧が希求されている。

なお一部HP等の資料には国姓爺鄭成功神が主神とあるが右記の

ように本廟の主神は王聖公である。

配神12 台南安平開台天后宮（主神 媽祖）

本宮については廟配布の紹介パンフレット『安平開臺天后宮』（日本語版）より引用する。

安平天后宮とは、中国の「福建通誌」、高拱乾修の「台湾府志」に記載されている天妃宮のことで、元は鳳山県安平鎮渡口、現在の台南市安平区石門小学校の場所にありました。祀られている聖母像は、一六六一年、鄭成功が水軍を率いて台湾を奪回した際、守り神として湄洲からお迎えしたものです。オランダ人を追い払った後、軍民が協力して廟を建て、これを祀りました。民国八（一九一九）年に日本人相良吉哉が編纂した「台南州祠廟名鑑」の記載によると、康熙七（一六六八）年創建。蘇同炳が著した「台湾古今談」には「最も古い媽祖廟は、昔、安平にあった開台天后宮」とあり、既に三百年余りの歴史を有します。光緒初（一八七五）年、沈葆楨が鄭成功を祀る寺（現在の延平郡王祠）の建立を朝廷に願い出て許された際、開台天后宮と名を改めました。（中略）民国九十四（二〇〇五）年四月、日本親善訪問団が本宮を参拝された際、本宮より延平郡王鄭成功の神像1体を贈呈いたしました。この像が長崎県平戸市に祀られています。同年七月には、本宮より鄭成功の将軍「万礼」と「甘輝」の神像を長崎県平戸市にお送りし、鄭成功像と共に七

月十四日の生誕祭に参加してもらいました。（中略）昭和三十七（一九六二）年、

台湾政府より鄭氏廟の砂が平戸に送られ、川内丸山に鄭成功の廟が建立されました。

この平戸の廟宇が本稿「D・中国大陸及び日本の主神廟」に掲載した「鄭成功廟（長崎県平戸市川内町九七五―一）」である。また



配神12 台南安平開台天后宮

清朝期奉祀開始とみられる台中清水開山宮は台中市清水区高北里地区の公廟であり、ここは鄭姓集落である。本廟隣には鄭姓宗祠がある。また本廟の祖廟は台南の安平開台天后宮である。このように開台聖王は安平開台天后宮内で配神ながら大いに人々の信仰を集めている。なお「文化資源」には主神に天上聖母と鄭成功が併記され、主神の呼称を開台天上聖母とするが、本廟の主神は天上聖母（媽祖）、配神を鄭成功（開台聖王）とみるべきであろう。

配神13 台南鹿耳門天后宮（主神 媽祖）

本宮については「特展図録」、「文化資源」等による。

鹿耳門天后宮の創建は「文化資源」によると永曆十五年（一六六二）年という。「特展図録」では同治十（一八七一）年、曾文溪の洪水により鹿耳門古廟が破壊されたが、媽祖像は村民林贊、林硯、林白等により救出された。その後暫く炉担当となった民家で一年交代の輪番祭祀がされていた。光復となり村民は民国



配神13 台南鹿耳門天后宮

三十五（一九四六）年資金を集め「天后宮」を現住所に再建した。さらに民国六十六（一九七七）年にふたたび再建を決め、民国七十二（一九八三）年に竣工、現在の廟貌となった。

鄭成功が鹿耳門から上陸ことに感謝するため戦艦上の媽祖を奉祀した。再建後、鹿耳門天后宮では主神媽祖の他、左殿に延平郡王鄭成功が供奉されている。鄭成功神像は莊嚴で、壁石には鄭成功に関する歴史が刻まれている。廟中の対聯には鄭成功と媽祖の関係が記されている。なお本宮では鄭成功関連資料を展示した鄭成功文物室が併設される。

配神14 台南永康二王廟（主神 鄭府二王爺）

本廟については「文化資源」及び民国一〇〇（二〇一一）年一月の実地調査等による。

二王廟の主神は鄭府二王爺である。廟内現存の咸豊七（一八五七）三月、鄭朝蘭撰「重建二王廟碑記」によると、城の北六、七里のところ、二王崙があり、先人がここに建廟をした。そして關聖帝君、隣に二王を供奉したため「二王」と名付けられた。關聖帝君の供奉は二王と深く繋がっているため、二王は本廟の基礎とも言える。



配神14 台南永康二王廟

相良吉哉『台南州寺廟名鑑』の記載によると、網寮二王廟は康熙年間（一六六二年―一七二二年）創建だが、当時の建立理由は不明。その後、咸豊三（一八五四）年、明治三十七（一九〇四）年、大正五（一九一六）年廟の修繕が行われた。さらに光復後の民国三十八（一九四九）年に現在地に移転、民国四十三（一九五四）年完成、民国四十六（一九五七）年に祈安清醮大典が挙行された。二王

廟は現在、台湾唯一の鄭経を主神として奉祀する廟宇であり、開基二王爺鄭経の神像はいまでもここに保存されている。

配神15 台南開元寺開山堂（主佛 三寶佛）

本寺に関しては「特展図録」による。開元寺の現住所にはもともと「北園別館」があった。これは鄭成功の息子鄭経が母親への親孝行のために明朝の永暦三十四（一六八〇）年に建てられたものである。清朝、康熙二十二（一六八三）年、鄭克塽は清朝に降伏、台湾鎮總兵王化行と台湾巡台兵備道王效宗等は台湾本島には寺院が不足しているところから竹林が茂り広く静かな北園別館を寺院建立に最もふさわしい場所とした。



配神15 台南開元寺開山堂

康熙二十九（一六九〇）年に建築を始め、翌年完成、「海会寺」と名付けられた。乾隆から嘉慶年間にかけて廟名は数度変えられた。そして咸豊九（一八五九）年、正式に「開元寺」と決定した。開元寺は鄭経と鄭成功の元妻董夫人と関係があり、第二進左側の開山堂には延平郡王神が供奉されている。

配神16 台南天壇武聖殿（主神 玉皇大帝）

本廟に関しては「特展図録」による。天壇は通称天公廟、咸豊四（一八五四）年に創建、主神は玉皇大帝、さらに多くの配神を祀る。伝統的な建築物で華麗な装飾の萬神殿である。天壇は歴代の修築で、主体の部分は古貌を維持している。民国六十九（一九八〇）年、天壇の本体南側に武聖殿を増築、主神として文衡大帝が祀られ、右側には配神として延平郡王神像が祀られている。造形は一般的な民間信仰の廟宇とは異なり、文官のいでたちである。

配神17 高雄旗山紫雲堂（主神 観音菩薩）

本堂については「高雄市旗山区—紫雲堂」（雲松子居士作・民国一〇〇年四月十六日・http://clouddeep.blogspot.com/2011/04/blog_post_8685.html?m=1）及び民国一〇四（二〇一五）年十二月の実地調査等による。

本堂の由来は丙子年の時の旗山鎮の福安莊《即雞油脚》宣化堂における扶鸞による降臨筆記の記述による。楊救貧仙師を通して砂盤上に筆記する方法で指示を出した。祥雲が集まる場所は聖地である。当時賢人に頼みそれを見つけた。それが現在の永和里大碑紫雲堂の地である。

本廟は中央山脈に直面し、山に囲まれた風光明媚な場所で、いわゆる天然の聖地といえる。莊民が集まり草堂を創建した。当初は当

地霊場にもとあつた天然の石像（現在の石観音）を奉祀していた。その御加護に参詣者は絶えなかつた。また母堂宣化堂の主席恩師観音大士、現在の本堂の主席は時々鸞書を記し世間を教化した。そして再び信徒等に寄付を募り民国五十六（一九六七）年再建された。その後美濃鎮善信宋賢祥の寄付により、後殿の玉清宮が民国六十五（一九七六）年に完成した。玉皇天尊、三聖恩主、至聖先師、開台聖王を供奉する。石観音の別名は観音仏母という。結婚後長い間子室に恵まれなかつた夫婦が参詣の後、子を授かつたことによる。

なお〔文化資源〕には主神鄭成功とあり、近隣地域の鄭成功信仰の一翼は担っているが、上記、インターネット資料や実地調査から、私は本堂の主神は観音菩薩であり、開台聖王は副神と判断した。本廟は旗山地区の山間にあるが階段形状の大規模な廟宇で、開台聖王鄭成功神は最上層の三層右部に安座される。



配神17 高雄旗山紫雲堂

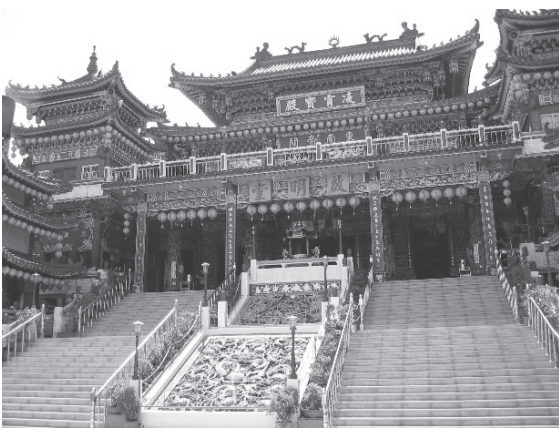
配神18 高雄左營東南帝闕樂善社啓明堂（主神 關聖帝君）

本堂については廟配布の紹介パンフレット『左營東南帝闕樂善社

啓明堂 沿革（日本語版）』から引用する。

一、本堂の開基 日本が台湾を統治（一八九五年—一九四五年）した初期。日本文化が徐々に侵入、在来の文化、民俗、教育、宗教等が色々な制限を受けたその為に段々と衰え有識者の心配を買ったが、外国の統治下に於ては如何ともなく難かつた。その時本堂の創建者、謝知、陳旺等の諸志士がこの情勢を憂い、神様をお願い伺いをたてたところ、鸞堂を立て、神の教へを仰ぎ、人道を唱へ、善を施して、伝統の風俗を守れとのお告げがあつたので、一八九九年「明德堂」を陳重三の私宅に設け「五公菩薩」を主神として祀った。そしてそれら創建当時の志士達のためまぬ努力と貢献で本堂が出来上つた。

二、堂名称の変更 一九〇三年旧城内にあつた関羽（関聖帝君）を祀った。関帝廟が廢墟になるのを惜んだ本堂の諸信士が関羽（関聖帝君）の神像を本堂の本尊としてお迎え、祀る事にした。又同年孚佑帝君が神のお告げを



配神18 高雄左營東南帝闕樂善社啓明堂

伝達、「明德堂」の堂名を「啓明堂」に更め、関羽（関聖帝君）を本尊にすると共に後に文武両聖人を祀る基礎を造った。（中略）七、東南帝闕の再建 一九七三年、「啓明堂」の平家建築を取り壊し、新たに「東南帝闕」を建てる御神勅に基き、全堂の信者が喜び勇んで再建に協力の結果、一九七四年に二階建の新殿が落成、内部装飾、佛像の金粉塗り張り等を終え、六月廿四日の関聖帝君の誕生の吉日を選び、神像の安座大典を先に行った。祭壇には至聖先師孔子（文聖）、関聖帝君（武聖）を主神に岳武穆王（岳飛）、延平郡王（鄭成功）を陪神として祀った。又一九七六年間七七四十九日の落成慶祝大典を行うなど、本堂は一躍して台湾全省の聖堂としての名声を博した。

配神19 台東東海龍門天聖宮（主神 天上聖母）

本宮については「台東縣寺廟之旅 台東市 天聖宮」(<http://16328.10.78/content/local/taidon/fuhin/tem/tdc42.htm>) 及び民国九十五（二〇〇六）年七月の実地調査等による。

東海龍門天聖宮は民国六十九（一九八〇）年創建された。現在は四百人が宿泊できる香客房も設置された。時折、他地域から参詣者が赴く。本宮は台東唯一の観光地的な色彩のつよい廟宇である。

主持人、陳萬船主委の功労である。陳萬船主委は当時、電気販売の商人だったが、十数年前から宮務にも熱心にとりくんできた。彼の話によると以下のことは神明の指示だと強調する。民国五十三

（一九六四）年、中壇元帥、観音佛祖、土地公を望里の民宅内に祭祀し、その後は中山路中央市場二階に祀った。

さらに民国六十九（一九八〇）年の神明の指示により、台南鹿耳門媽祖を濟世救民のために台東にお迎えした。そして十一の委員は十一度ポアポエをおこない本件は成就し、

当時、すぐに現在廟宇が立つ土地を購入した。主神は媽祖で、また延平郡王鄭成功も祭祀する。

なお民国一〇八（二〇一九）年現在台東市には現在のところ開台聖王主神廟は確認されていない。しかし台東市には全国開台聖王聯誼会にも入会しており人口に膾炙している本宮があり開台聖王は配神であるが、当地の鄭成功信仰を大きく担っているのである。



配神19 台東東海龍門天聖宮

（完）

Abstract “The History of Taiwan Koxinga’s *Shushin* temple addendum and *Haishin* Temple”

OMATA, Kikuo

Abstract :

Until today, I’m stilling research about those temples which praying on Zheng Cheng Gong on *Shushin* and filed surveys in Taiwan since 2002. The history of temples established are translated into Japanese language and introduced on my research paper “The Origin of Koxinga’s Temples in Taiwan (1-2) - Established in Ming-Ching Dynasty (Earlier and Later Period)” (“Toyo University Graduate School Periodical No 47 and 48”) March 2011 and March 2012. “The origin of Koxinga’s Temples in Taiwan (3): Established during the reign of Japanese (Earlier Period)” (“Toyo University Graduate School Periodical No 52”) March 2014.

Except, I was incorporated research “The origin of Koxinga’s Temples in Taiwan: Established during the reign of Japanese (Later Period) and “The Restoration Period Established - Taiwan Zheng Cheng Gong temple history” to publish on my book named “Taiwan Kaitai Zhengwang - Zheng Cheng Gong *Shushin* temple research”.

After that time, I’m stilling research about Zheng Cheng Gong and find some new temples they are praying on Zheng Cheng Gong on *Shushin*.

This paper will introduce with six temples they are praying on Zheng Cheng Gong on *Shushin* (three temples were established on Ming-Ching Dynasty and three temples established on The Restoration Period.) Except Taiwan, Japan and China is also having one temple they praying on Zheng Cheng Gong on *Shushin*, I’ll introduce the two place too. Another ten or so temples, they are praying on Zheng Cheng Gong on *Haishin*, because the research was finished, I also have to publish on my research paper.